特集 3 これからの人権教育カリキュラムづくりの手法

「ぬのしょう、タウン・ワークス」の展開

林 和広

1 布忍小学校の人権・部落問題学習で大切にしてきたこと
―継承する三つの視点と展開の柱―

人権・部落問題学習で大切にしてきたことは、次の三点にまとめることができる。

①自分の生活、親の働く姿、生い立ち・自分史に返して、自分の問題として考えること。

②地域の人からの聞き取り、フィールドワークなどを通して、子どもたちの出会い・体験・感動を大切に、地域と結んだ人権・部落問題学習を進めること。

③子どもや親の思いを集団に返すこと、地域子ども会と連携し、子どもの立ち上がりを通して学級集団の質を高める、集団づくりと結んだ人権・部落問題学習を進めること。

これらの三つの視点で、学習方法や学習形態を工夫して取り組みを進めてきた。その中で継承すべき四点の具体的な展開の柱が明らかになってきている。

①各学年の年間テーマを設定し、一年間を通して取り組むこと。六年間の系統化と通年化である。

②「聞き取り」を基にした地域教材、父母からの聞き取り、フィールドワークなど人との出会いや体験・感動の学びのスタイルを活用すること。

③クラスの中での「語る会」・クラス討論などを通して、一人ひとりの子どもの立ち上がりと仲間との思いの共有を通して、集団の質を高める集団づくりと結んだ学習を進めること。

④校内全体で「人権・部落問題学習集中週間」を各学期に設定して取り組みを進めること。

2　新しい人権学習「ぬのしょう、タウン・ワークス」のカリキュラムづくり

私たちは、自己実現を目指す子どもの育成には、「自己教育力」と「豊かな人権意識」と「自尊感情」の育成がキーワードだと考えている。なかでも、国際理解、環境、福祉・ボランティア等の今日的かつ多様な人権教育課題に子ども達がふれることで、さらに共感する心を育み、「自分をかけがえのない存在と感じ、自分と人間に誇り」を持てる感性を培いたいと考えている。また、さまざまな出会いや体験を通してお互いがより豊かになれることを目指したいと考える。

そのために、人権教育の「知識・態度・スキル」の育成を目指して、統合的に押し進めていき、その中で育みたい態度やスキル、そのための五つの課題を明らかにした。

〈態度〉
・人間への尊厳
・セルフエスティームの育成
・協力できる力
・共感し合える心

〈スキル〉
・コミュニケーション力
・アサーティブネス
・意志決定力

〈五つの課題〉
①選択・参加・体験型の多様な学びのスタイルを導入し、子どもたちが自ら学ぶことを大切にする。
②地域の人びと、さまざまな人びととの出会いや体験・ボランティア活動を通して、多様な人権課題を学ぶ。
③地域（校区・松原・大阪）の人びととのネットワークづくりの中で、人権・総合学習を進める。
④仲間と気持ちでつながり合うことで、一人ひとりがかけがえのない自分を感じ合え、共に行動に移せる態度や技能（スキル）を身につけた自立した個人と集団づくりをめざす。
⑤とりわけ、ムラの子どもたちが新しい多様な人権教育課題を選択・参加・体験・感動を通して学ぶ中で、自分自身で「気づく」（＝加害性の認識等）ことを大切にしたい。

また、さまざまな人との出会いを通して、ムラの子どもたちが自らの生活や父母の労働・生い立ちに重ね合わせ共感する心をさらに育み、そして部落問題をより深く考えていくことを大切にしたい。このような他者への共感とそれを通した自分自身の立ち上がりが、仲間とのつながりをさらに深め・広げ、仲間を支援していくことになると考えている。

こうした活動を通して、ムラの子どもたちに「自分を好きだ」と思い、自らのアイデンティティを確立し、自分の将来を選択していく生き方を培っていきたいと考える。

3　「ぬのしょう、タウン・ワークス」のカリキュラム

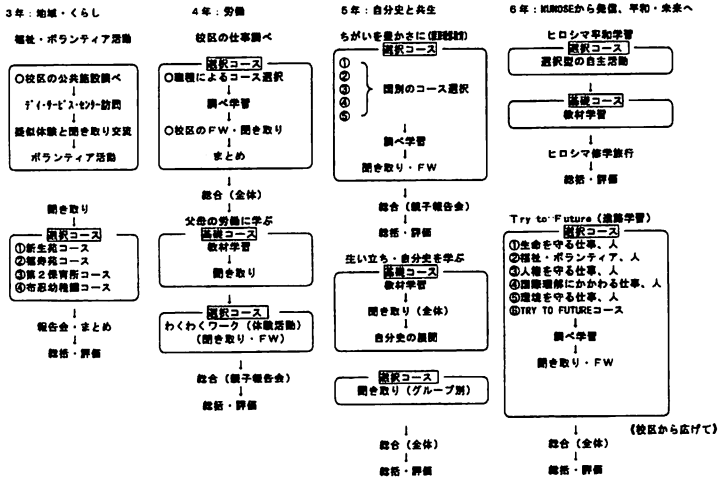
（1）「ぬのしょう、タウン・ワークス」の年間テーマ

『学びと人権・共生の地域ネットワークづくり』をテーマに、地域（校区、松原、大阪、アジア）を通して、部落問題をはじめとする多様な人権課題を学んでいく。

各学年の年間テーマ
一年：なかま、あそび
二年：なかま、あそび、ちいき
三年：地域、暮らし（福祉・ボランティア教育と結んで）
四年：労働（部落問題学習、環境教育と結んで）
五年：自分史、共生（部落問題学習、多文化教育と結んで）
六年：歴史と未来・平和（部落問題学習、多様な人権教育と結んで）

（2）「ぬのしょう、タウン・ワークス」のカリキュラム（九六年度実施）

【ぬのしょう、タウン・ワークス】のカリキュラム



（3）学習形態及び方法

①一学期は、子どもたちが多様な人権教育課題に迫れるよう自己選択できるコースを設定し、多様な活動や出会いや体験ができることをポイントとする。

②二学期は、子どもの自己選択による体験型学習スタイルを取り入れ、これまでの人権・部落問題学習の内容を自分の生活や父母に返して考えることをポイントとする。

③時間設定は、学期毎の集中週間期間内の特設時間を基本とするが、スキルを育てるために、総合学習「ぬのしょう、タウン・ワークス」の時間を設定し、総合的、継続的な取り組みを行う。例えば、三年生では、校区内のお年寄りの方との交流を年間通して計画し、双方向の交流を活発に行っている。

④これらの学習を総合するものを企画する。昨年度は中学校区三校による「三中校区ヒューマンタウンフェスティバル」を開催した。とりわけ「ヒューマンイベント」のコーナーは子どもたちが様々な取り組みを発表し、地域の人びととの交流を深める場として実施した。

障害者と社会参加

人権ブックレット45

●A5判●95頁

●定価600円＋税18円

機会平等の現実―アメリカと日本

定藤丈弘著

障害者のあらゆる社会参加に道を開き、ADA（障害者をもつアメリカ人法）の評価が待たれる米国。それに比べ、雇用や教育の機会平等はおろか移動の自由の保障も不十分な日本の現状を明らかにする。